

NEJIREBANE, No. 76, 15.Sep., 1997

奥田好秀氏蒐集の珍しいコメツキムシ

岸井 尚

〒569-11 高槻市上土室1丁目 10-6-410

昨年(1996)末に開かれた本学会の総会時、奥田好秀さんが各地で採集されたコメツキムシの標本の同定を依頼された。甲虫用の印ろう箱に透き間なく詰められたもので、一見しただけでも大変面白い種が多数見られた。転宅やら何やらで落ち着いて見ることが出来ずにいたのであるが、気になるものが多く、暇をみてはのぞいていて最近漸く全部を見終えたが、全体で87種からなり2種は未記載で、多くの府県単位での未記録種が含まれていた。未記載のものについては更に精査のうえ、いずれ会誌に投稿することとし、今回は取り敢えず各地域での記録のないものや興味ある種について報告したい。なお、貴重な資料を拝見させていただいた奥田さんならびに、仲介の労をとられた水野弘造さんに心よりの謝意を表したい。

Lacon (Alaotypus) maeklinii maeklinii (CANDÈZE, 1865) オオサビコメツキ(図1)

1♀, 京都府舞鶴市与保呂林道, 9.VII.1995.

京都府は筆者にとっては調査上のメインフィールドであったが、この種は得られていなかった。関西では滋賀・京都以外からの記録例は少なくないのであるが、今までこの両地域からの報告や資料を見ていない。

Homotechnes motschulskyi ssp. ミヤマヒサゴメツキ亜種(図2)

1♀, 奈良市春日山, 3.V.1983.

産地とその大型な体形から、一見した時 *H. brunneofuscus* チャバナヒサゴメツキと見なして仕舞った個体である。奈良市内にある春日山原生林は興味深い昆虫が多く、古くからよく調査されて

いた所であり、筆者もかつてしばしば訪れたこともあるが、周囲に特に高い山岳地帯があるわけではなく、むしろやや高めの低山地帯とも言うべきこの地域からミヤマヒサゴメツキが発見されるとは思ってもいなかったのが、大変驚いた次第である。大平(1995)が三重県美杉村平倉から記載した *spp. kawasei* ヒラクラミヤマヒサゴメツキに似てはいるが、より大きく前胸背板点刻が明瞭に微細で粗であることなどやその他多くの点で異なり、未記載の亜種であることは間違いないものと思われるので、早い機会に精査のうえ記載したいと考えている。なお、まだ雌一頭のみなので、雄などの複数個体が得られることを願っている。

Limoniscus niponensis (LEWIS,1894) ニホンカネコメツキ(図3)

1♂, 山梨県大菩薩日川林道, 4.VI.1983.

長野・静岡など周辺地区からの記録例はあるが、山梨県からは初めてと思われる。なお、本種に極めてよく似た未記載種があり、中部山岳地帯に分布している。

Kibunea approximans (LEWIS,1894) キアシヒメカネコメツキ(図4)

1♀, 山梨県西桂町三ツ峠山, 14.VIII.1982

本邦に分布する本属の5種のうち山梨県からは他の4種は全て記録されていた。本種は本属としては寧ろ最も普遍的に分布するものと思われているが、これまでに山梨県からの記録を見なかった。*K. narukawai* や *K. kouichiana* の様に極めてよく似た種が山梨県を原産地とするので、今まで少し奇異に感じていたののであるが、これで疑念が氷解したわけである。

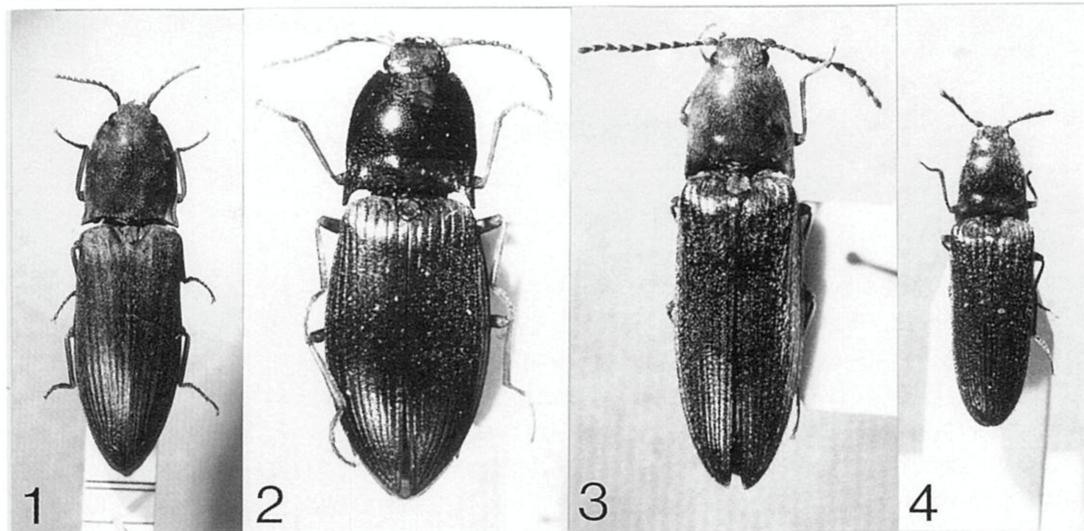


図1-4: 1. オオサビコメツキ(♀, 19.9 mm); 2. ミヤマヒサゴメツキ春日山亜種(♀, 13.4 mm); 3. ニホンカネコメツキ(♂, 12.3 mm); 4. キアシヒメカネコメツキ(♀, 7.4 mm).

Harminius galloisi MIWA,1928 ガロアムネスジダングラコメツキ(図5)

1♂, 京都府舞鶴市与保呂林道, 9.VII.1995.

本州の山岳地で灯火採集の際、個体数は少ないが得られる機会が少ない種で、その特異な形態で採集時記憶に残りやすい種である。しかし近畿地方とその周辺では報告例が少なく、奈良・和歌山の高地帯以外では福井からの記録を見るのみであった。京都の北山地区や比叡・比良山に分布の可能性はあると考えていたが、これで京都府北部には分布することが明らかになった訳である。

Harminius nikkoensis MIWA,1928 キムネスジコメツキ(図6)

1♂, 山梨県大菩薩日川林道, 28.VI.1980.

本種は三輪(1928)により、E.GALLOIS氏が日光中禅寺湖畔で1915年8月10日に採集した標本に基づき独立種として記載されたが、後に(1934)前種の異常型に変更された。しかし筆者(1979)は長野県と福島県からの資料を検討した結果、三輪が当初見なした様に独立の種とすべきであるとして処置した。現在のところ分布域は本州の関東・中部山岳地帯に限られる様で、上記の福島・栃木・長野の三県からのみ知られているに過ぎなかった。山梨からは上記の標本以外に籾倉正人氏のご好意で検した資料もあるので下記しておく。

1♀, 山梨県須玉町観音峠, 24-31.VII.1994, M.HINAKURA leg.

Dicranthous undosus ontakeanus (KISHII,1969) オンタケダングラコメツキ (図7)

1♀, 長野県木曾御岳八海山(alt.1600m), 29.VII.1988

筆者(1969)が30年ほど前にこのコメツキを見た際、第一感としてヨーロッパからカナダまでの高地および寒冷地に広く分布している本属の基本種 *D. undulatus* を思い起こしたほど色彩斑紋がそれとよく似ていた。しかし上翅の色彩を除くと、北海道・本州の中央高山地帯とサハリンに分布する *undosus* と大きさや一部の特徴を除いて、ほとんど同じであり、資料もただ一頭の雌のみであったので御岳山特有の亜種と見なした。その後単なる色彩の変異型と見ていた時期もあった。しかし、御岳山からは一般の *undosus* と同定できる個体も採れず、また *ontakeanus* もその後新しい資料に接する機会をもたなかった。今回八海山から得られた資料は30年前の標本と全く同じで、ほとんど異なる点を見いだせなかった。それで改めて *undulatus*, *undosus*, *ontakeanus* の比較検討をしたのであるが、多くの固有の特徴を持つことから、*ontakeanus* は前二種からは独立の別種と見るべきであるという結論を持つに至った。ただ本報では最初の扱いのままに留め、別の機会に改めて処置することとする。一般に *Dicranthous* 属では雄を検する機会が少なく、*ontakeanus* も今のところ雌のみなので雄採集の報を待ち望んでいるところである。

Acteniceromorphus nipponensis OHIRA,1973 ニホンフトヒラタコメツキ (図8)

1♀, 福島県楡枝岐村舟岐林道, 23.VI.1979.

甲信越・関東・東北の高地帯に広く分布するが、福島県からは初めてと思われる。

Hayekpenthes pallidus pallidus (LEWIS,1894) ホソキコメツキ

1♂, 東京都八王子市高雄山, 18.VII.1981.

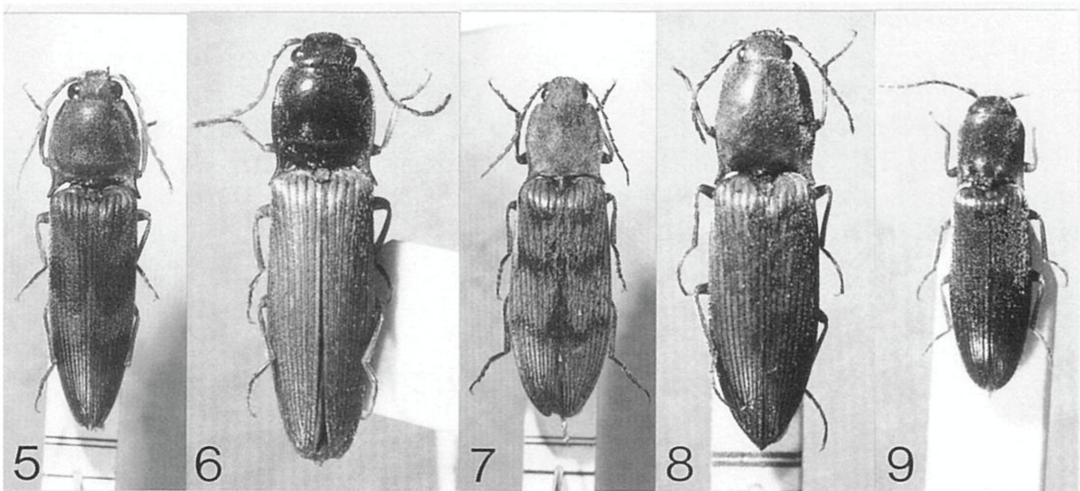


図5-9 : 5. ガロウムネスジダングラコメツキ (♀, 19.7 mm); 6. キムネスジコメツキ (♂, 12.4 mm); 7. オンタケダングラコメツキ (♀, 17.8 mm); 8. ニホンフトヒラタコメツキ (♀, 13.7 mm); 9. ナオミヒメコメツキ (♀, 7.4 mm).

関東地方では LEWIS (1894) の記載時、日光が採集地の一つとなっている。後に大川秀雄 (1982) が栃木から再報し、さらに (1990) の目録では同県下の各地から7頭の記録をされている。しかし、同好会誌などのすべてを精査したわけではないが、筆者の知る限りでは関東地方の記録はこれのみで、東京都からは初めてと思われる。

Dalopius japonicus KISHII, 1984 ミヤマナカグロコメツキ

1♀, 福島県桜枝岐村舟岐林道, 23.VI.1979.

東北地方では普通に見られるが福島県からの資料は初めてである。

Dalopius naomii KISHII, 1981 ナオミヒメコメツキ (図9)

1♀, 福島県桜枝岐村舟岐林道 23.VI.1979.

Dalopius 属は北米で多くの種に分化しているが、本邦でも既に11種のもの知られるに至った。いずれも一般には夏期花上で多くの個体が見られるが、本種は珍しい種の一つで、現在のところ青森・岩手・新潟・栃木・長野・岐阜からそれぞれ若干個体が報告されているに過ぎず、福島県からの記録は初めてと思う。大型で一様な赤褐色の体色、極めて幅の広い雄生殖器など、他の種類とは著しく異なる特徴で分かりやすい種である。

Ectinoides insignitus insignitus (LEWIS, 1894) ヨツキボシコメツキ

1♀, 千葉県清澄山, 30.IV.1990.

千葉県のコメツキ相についての同好会誌などの詳しい情報を持ち合わせていないが、知る限りでは本種の千葉分布の報告は初めてと思う。

Melanotus (Melanotus) legatoides KISHII, 1975 ヒメクシコメツキ

1♀, 福島県館岩村罅沢林道, 11.VI.1994.

北海道から屋久島まで広く分布するが、東北地方の記録は青森・山形のみであった。

Platynychus (Platynychus) nothus nothus (CANDÈZE, 1865) オオハナコメツキ

1♂, 福島県桜枝岐村舟岐林道, 23.VI.1979.

本種もまた北海道から屋久島・口永良部島まで普通に分布し、南西諸島にも別亜種が知られている。東北地域では今まで福島県と宮城県からの記録を見なかった。

Paracardiophorus subaeneus subaeneus (FLEUTIAUX, 1902) ナミクロハナコメツキ

1♂, 岩手県下閉伊郡川井村平津戸(吉部沢), 7.VIII.1983

コメツキの同定の際、最も苦勞するものの一つが、この *Paracardiophorus* 属の仲間であることは、一度ピノキユラー下でのぞいてみたら分かると思う。とにかく分類同定は専心の注意を要するグループである。雄の生殖器構造はその中の救いの女神とも言うべき特徴であるが、それも経験と多くの比較参考資料を検討しての話であり、同定の難しさには変わりはないと思う。最近になり大平 (1986, 1995) の優れた電顕像による研究などで大分解明されてきているが、まだ未解決の点を多く持つグループである。本種は東北・北海道に分布する種で、北海道のものは別亜種とされている。今のところ青森・山形からの確実な記録があるのみであるが、分布域はもっと広いものと思われる。

(きしいたかし)

アバタツヤナガヒラタホソカタムシを三重県で採集

生川 展行

〒513 鈴鹿市木田町 2399

平野 (1996) は、*Penthelispa sculpturatus* (SHARP) アバタツヤナガヒラタホソカタムシと、



アバタツヤナガホソカタ

Penthelispa vilis (SHARP) ツヤナガヒラタホソカタムシの相違点について詳しく述べ、アバタツヤナガヒラタホソカタムシは原記載以降、対馬で1頭、鳥根県で3頭採集されているにすぎないと報告している。筆者は、この報文を基に所蔵標本を調べたところ、アバタツヤナガヒラタホソカタムシの標本を見いだすことができたので報告する。なお、ご多忙中のところ標本写真を撮影していただいた市橋 甫氏に心よりお礼申し上げます。

1ex., 三重県尾鷲市桃頭島, 3.V.1996, 筆者採集。

照葉樹林内の枯れ枝のピーティングにより得た。対岸(紀伊半島側)で採集した標本も確認したが、全てツヤナガヒラタホソカタムシであった。

文献

平野幸彦, (1996). アバタツヤナガヒラタホソカタムシは絶滅種か. 神奈川虫報, (115): 19-22.

(なるかわのぶゆき)

クロムネビロオオキノコの採集記録

生川 展行

〒513 鈴鹿市木田町 2399



クロムネビロオオキノコ

Microsternus yamadai CHŪJŌ et SHIBATA, 1963 クロムネビロオオキノコは、奄美大島の Okumata と Ikari で採集された5頭の標本を基に記載された種である。

その後、CHŪJŌ(1969)は、全体図をつけて再記載をおこなっているが、検視標本はタイプ標本のみである。中根(1982)は、所蔵標本を基に鹿児島県のオオキノコムシをまとめたが、クロムネビロオオキノコに関しては、CHŪJŌ(1969)の記録を再録したにすぎない。筆者の知る限り、その後本種の記録はないようである。

最近、和歌山県の的場 績氏より、同氏が奄美大島で採集されたオオキノコムシを譲り受けたが、その中に本種が含まれていたもので、記録しておく。

1ex., 鹿児島県奄美大島湯湾岳, 21.IV.1995, 的場 績採集(生川展行保管)。

キノコの生えていた倒木の下で落ち葉を、ベルレーゼにかけて得られた。なお、形態については、CHŪJŌ(1969)に詳しいが、参考までに主な特徴だけ述べておく。

体長は1.9 mmと、日本に産する *Microsternus* 属の中では最も小さく、前胸背には側縁に沿って縦の深い溝がある。また前胸背の後縁に沿って粗大点刻列があり、この粗大点刻列は中央部で前方へ丸く張り出し、この点刻列と前胸背後縁の間は、無点刻である。この特徴は *M. higonius* LEWIS ヒゴムネビロオオキノコと似ている。

文献

CHŪJŌ, M. and T.SHIBATA, (1963). Description of a new Erotylid-beetle from the Island Amami-ohshima, Loochoos. Niponius, 2(1): 1-2.

CHŪJŌ, M. (1969). Fauna Japonica, Erotylidae. 316pp., 23pls.

中根猛彦, (1982). 鹿児島県の甲虫記録 I 私の所蔵標本から オオキノコムシ科. SATSUMA, 31(88): 113-116.

(なるかわのぶゆき)

日本未記録種のキスイムシ *Antherophagus pallens* (LINNAEUS, 1758) の発見

芳賀 馨

〒336 埼玉県浦和市北浦和5-15-39-607

Antherophagus pallens (LINNAEUS) は、北海道・本州・九州に分布する *A. nigricornis* (FABRICIUS) ハナバチヤドリキスイの同属種で、従来は西ヨーロッパから沿海州にかけてのユーラシア大陸北部から知られていた。筆者は本種を北海道で採集したので日本初記録として報告する。

1♂, 29.VII.1996, 北海道河西郡中札内村本村(札内川中札内橋直下流左岸河川敷)芳賀 馨採集, 上野輝久同定・所蔵(図1)。

なお、上記以外に以下の個体が採集されているので、宮下公範・水野弘造・上野輝久諸氏の了解のもと、併せて記録しておく。

1♀, 8.VII.1991, 山梨県韮崎市鳳凰山 細田倅市採集, 上野輝久所蔵(水野弘造経由)。

1♀, 5.VIII.1992, 北海道河東郡上士幌町上音更 宮下公範採集, 上野輝久所蔵。

後の2♀は筆者採集の個体より以前から上野博士に送られてあったものであるが、♀のため同定が保留されていた。今回♂が得られたことにより、*A. pallens* と同定された。中札内の採集地点は札内川の河川敷に成立したヤナギ林で、樹高は10m前後、胸高直径は15cm前後である。樹冠が鬱閉して林内の日当たりが悪く、林床にはフキが密生して表土が常に湿っているところの、北海道におけるヤナギ林の最も普通の状態である(蛇足ながら、このようなヤナギ林では本州と共通の普通種のカミキリムシしか望めない)。林床と林縁には点々とエゾニュウの花が咲いており、普通種のケシキスイ・カミキリモドキ・トラカミキリの類が来集していた。河道側の林縁のやや日が当たる位置に生えた株の花から、1頭だけ採集されたものである。この日は1996年北海道において、7~8月を通じて数日しかなかった炎天の日で、時刻は11時ころ、気温は30°C前後(北海道電力管内の最大需要が記録された日と記憶している)であった。

ЛЮБАРСКИЙ(1992)によると、ロシア東部には本種と *A. nigricornis* を含めて3種の *Antherophagus* が産する。残る1種の *A. canescens* も、既知の分布地から推して日本にも産してもおかしくない。この機会に上記文献中の本属に関する記述を翻訳し、*A. pallens* の同定を可能にするとともに *A. canescens* の探索を呼びかけたい。

Antherophagus LATR.: 体はかなり大型で、通例短い微毛で覆われる。触角は11節からなり、先端の3節が球桿を形成する。前頭はかすかにえぐられる。複眼は前胸背前縁から離れ、側頭は明瞭である。前胸背側縁の縁取りは前角付近でいくらか側縁から離れ、太い小隆起を形成する。点刻は通例比較的細かく密で、上翅においては前胸背におけるより疎で不明瞭となる。



図1. *Antherophagus pallens* (LINNAEUS)

1. 前胸背側縁の縁取りは前角の太い小隆起上で終わり、前縁に届かない(図3)。前胸背は基部手前に横長の押圧部を欠き、側縁は♂では両側平行、♀では前方に向かって狭まり、後角は直角かまたはわずかに鋭角。鶯色の黄色で、細かい倒伏した黄色味を帯びた微毛で覆われる。体長は4.0-5.0 mm。アムール・沿海州・サハリン・南千島(色丹島)・シベリア・ソ連欧州地区。日本・モンゴル・西ヨーロッパにも産する。成虫は花上で発見され、幼虫

はハナバチの巣の中で育つ。.....*A. nigricornis* (FABRICIUS)
 --. 前胸背側縁の縁取りは、前縁まで(届きつつ)、前角の太い小隆起を境界づける。前胸背は基部に向かって弱く、しかし明瞭に狭まる(図2)..... 2

2. 背面は非常に繊細な黄色味を帯びた微毛で覆われ、前胸背は無毛のように見える。前脛節の外角は先端において突起のように伸長することがない。錆色の赤色。体長 3.4-5.0 mm. アムール・沿海州・南シベリア・イルクーツク・カザフスタン・ソ連欧州地区。モンゴル・西ヨーロッパにも産する。成虫は花上で発見され、幼虫はハナバチの巣にいる。.....*A. pallens* (LINNAEUS)

--. 背面はかなり長い倒伏した微毛で覆われ、この微毛は前胸背上でも明瞭に認められる。前脛節の外角は先端においていくらか突起状に伸長する。鶯色の黄色。体長 4.0-4.5 mm. トウバ・ソ連欧州地区。中国北部・モンゴル北部・天山山脈・西ヨーロッパにも産する。極東でも発見されるかもしれない。.....

....*A. canescens* GROUVELLE (= *A. silaceus* ERICHSON)

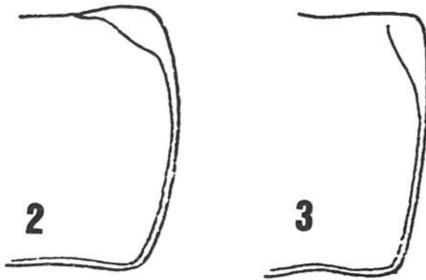


図2-3. 2. *A. pallens*; 3. *A. nigricornis*

上記の検索にも記載されているとおり、*pallens* は *nigricornis* から、前胸の側縁が前縁に達することで「明快に区別でき」る(上野博士教示)。将来日本から *canescens* が発見されればこの区別点だけでは不十分となるが、*canescens* は「頭部が長く密な毛で被われることで区別可能だと思」われる(同上)。

上)。

上記の検索では、*nigricornis* と *pallens* は色も異なるように記載されているが、筆者の手元にある *nigricornis* (秋田県乳頭温泉産、芳賀、1980 で報告した個体)と今回報告した札内川の *pallens* を比較した限りでは、ほとんど変わらないように見えた。ただし1頭同士の比較であるから断定はできない。

最後に、本報告を行うことを勧められ、同定・写真撮影のみならず有益な助言をいただいた上野輝久博士(九州大学)、採集記録の発表を快諾された宮下公範氏(江別市)、水野弘造氏(宇治市)に心よりお礼申し上げます。

参考文献

芳賀 馨(1980). 田沢湖周辺で採集した甲虫3種の記録. 昆虫と自然, 15(6): 40.

ЛЮБАРСКИЙ, Г. Ю., 1992. CRYPTOPHAGIDAE. Определитель Насекомых Дальнего Востока СССР. том III. Часть 2. pp. 245-275. Санкт-Петербург. (はがかおる)

ちょっと気になる甲虫の情報 (VI)

タイプ標本の一つは石下で、一つはアリの巣の中で部分的に食われたものが採集されたために、本種とアリの関係は命名されると同時にとりざたされることとなった。アリとの関係を力説する人もあれば、疑う人もあって、いまだによく分かっていないが、探ろうとすると僥倖を頼むか、かなりの努力を要することだけは間違いない。自ら採集された二氏に登場いただく。(水野)

アリスアトキリゴミムシ *Lachnoderma asperum* BATES

(1) アリスアトキリゴミムシの冬季採集

田中 勇

〒662 西宮市六軒町8-7

1997年2月17日、高槻市在住の河原氏の案内で、桂川右岸の河川敷(大阪府三島郡島本町)へ出掛けた。付近はサッカーグラウンド・テニスコート・ゴルフ場が点在するところで、淀川水系河川敷でよく見かける風景である。水はけのため人工的に掘られた幅1m深さ50cm長さ200mの溝と、直角に本流に流れ込む幅1m深さ2m長さ10mの溝があり、土手側には芝生が敷かれている。本流側はセイタカアワダチソウ・ヨシ・ヨモギ等の草地で、溝の壁面を掘ると、クビナガゴモクやキベリゴモク・アオゴミ等が出てくる。アリスアトキリは日当たりの悪い上部の砂地、下部の直径2~3cmの石ころのすき間、また苔の下の浅い部分に多く見つかった。砂地を壊すとアリの越冬も見られたが、直接アリの巣からは見いだせなかった。

2月17日(18exs.); 2月19日(4exs.); 3月7日(25exs.); 3月10日(29exs.); 3月25日(2exs.). 全て筆者採集。最後になったが、案内していただいた河原父子にお礼申し上げる。(たなかいさむ)

(2) アリスアトキリゴミムシの生態に関する一知見

森 正人

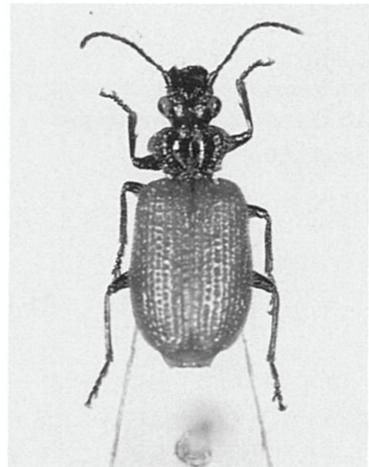
〒651-14 西宮市すみれ台2-2-5

アリスアトキリゴミムシは本州と国外では台湾に分布するアトキリゴミムシで、いずれの地でも比較的まれな種とされている。筆者は過去に何度か本種を採集する機会に恵まれ、また生態の一端を観察することができたので、過去の採集記録と併せて報告する(全て筆者採集)。

1ex., 9.VIII.1987, 岡山県真庭郡湯原町; 1ex., 9.VIII.1987, 岡山県真庭郡八束村; 1ex., 30.VII.1988, 三重県久居市榊原; 1ex., 2.VIII.1988, 大阪府茨木市佐保; 1ex., 18.VII.1993, 大阪府大阪市旭区(淀川)。

本種の生態に関してはほとんど未知で、好蟻性の種類ではないかと言われているがその観察例はあまり知られていない。戸澤(1943)は本種がアリの巣に潜り込んでアリの幼虫やアリの蛹を食うと述べているが、HABU(1967)はこれを確証がなく疑問としている。また、森本(1986)は社会性昆虫に同居する甲虫類としてアリの巣に同居する本種の名前をあげている。一方、笠原(1988)は福島県における本種の採集記録(ライトトラップ:1♂,4♀♀)と過去の文献から本種の生態について記述しているが、真に好蟻性かどうか疑問であるとした。

今回の採集記録は灯火採集によるものが多く(淀川での採集以外全て)、生態に関する手掛かりとはなりにくいが、大阪淀川の



アリスアトキリゴミムシ

記録については河川敷において本種がトビイロケアリ *Lasius niger* (LINNAEUS) の行列のなかを同じ方向に歩行しているのを観察したものである。当日の河川敷ではトビイロケアリの行列が各所で多く見られ、本種は一見これらの行列に参加して移動しているかのような状況であった。しかし十分な観察を待たずに採集したので、アリとの特別な因果関係については確証がない。

元宝塚昆虫館長の福貴正三氏からは、過去に旭区城北公園付近の草地や荒地で、石の下に潜んでいる個体を同じ場所で何度か採集した旨を聞いている。筆者が採集した地点とも比較的近く、このあたりは本種の生息に適した環境であると考えられる。本種が真に好蟻性種かどうかは興味あるところで、このことについては今後の観察研究に待ちたい。

貴重なご教示を頂いた福貴正三氏および採集に協力頂いた北山 昭氏にお礼申し上げる。

参考・引用文献

- 戸澤信義 (1943) 台湾におけるアリスアトキリゴミムシの記録. 宝塚昆虫館報(35):1-7.
 HABU, A. (1967) Carabidae Truncatipennes group (Insecta; Coleoptera). In: Fauna Japonica., 338pp., 27pls.
 深町宗通 (1981) 台湾におけるアリスアトキリゴミムシの記録. 月刊むし (130): 5.
 森本桂・林長閑 (1986) 原色日本甲虫図鑑(I), 保育社: 108-111.
 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝 (1985) 原色日本昆虫図鑑(II), 保育社: 170.
 笠原須磨生 (1988) 福島県のゴミムシ類 2種について. Elytra, Tokyo, 16: 122.

(もりまさと)

大峰山系弥山産ナガクチキムシの記録

奥田 好秀

〒562 箕面市瀬川 3-3-11-301

奈良県吉野郡の天川村と上北山村の境に位置する大峰山系の弥山は、紀伊半島最高峰である八経ヶ岳 (1915m) と隣接し、亜高山帯に至るまでの多様な植物相を呈しており、それに伴い昆虫相も豊富である。特にオオミネヒメハナカミキリの発見以来、大峰山系はさらに注目されるようになり、筆者も 1988 年以降度々、甲虫類採集のため訪れるようになった。今回はナガクチキムシの記録について報告する。報告リストはすべて国道 309 号行者還トンネルの天川村側入口脇の登山口から尾根筋までの弥山登山道沿い (奈良県天川村, 標高1150-1600 m) で筆者が採集したものである。

1. *Orchesia imitans* LEWIS アカオビニセハナノミ
2exs., 27.V.1988, ビーチングにより得た。
1ex., 14.VI.1997, 同上。
2. *Mikadonius gracilis* LEWIS キスジナガクチキ
1ex., 11.VI.1995, ビーチングにより得た。
3. *Phloiodytes obscura* (LEWIS) ビロウドホソナガクチキ
1ex., 10.VII.1988, ビーチングにより得た。
3exs., 14.VI.1997, 同上。
4. *Symphora atra* NOMURA ヒメナガクチキ
1ex., 17.VII.1988, ビーチングにより得た(尾根筋 alt.1600 m)。
5. *Spilotus unnotatus* (PIC) カタモンセマルナガクチキ
1ex., 11.VI.1995, ビーチングにより得た。



カタモンセマルナガクチキ

- 1ex., 14.VI.1997, 同上.
6. *Hypulus higonius* LEWIS ヒゴツツナガクチキ
1ex., 27.V.1988, ビーチングにより得た(alt.1200 m)
(大峰山系初記録).
7. *Hypulus acutangulus* LEWIS トゲムネツツナガクチキ
1ex., 10.X.1995, ビーチングにより得た(alt.1600 m).
8. *Ivania coccinea* LEWIS セアカナガクチキ
1ex., 10.VII.1988, ビーチングにより得た.
2exs., 14.VI.1997, ブナ倒木をはっていた(他にも数頭目撃).
9. *Melandrya modesta* LEWIS ミゾバナナガクチキ
1ex., 11.VI.1995, ビーチングにより得た.
1ex., 16.VI.1996, 立ち枯れをはっていた.
1ex., 14.VI.1997, ビーチングにより得た.
10. *Melandrya dubia niponica* LEWIS オオナガクチキ
1ex., 16.VI.1996, 飛翔中のもの.
2exs., 14.VI.1997, ブナ生木のこけむした部分をはっていた.
11. *Melandrya flavonotata* PIC ヨツモンナガクチキ
1ex., 11.VI.1995, ビーチングにより得た.
3exs., 16.VI.1996, ウロコタケ類が付着した立ち枯れにいた(動きは緩慢で, 手を近づけてもじっとしていた).
12. *Prothalia ordinaria* (LEWIS) ヘリアカナガクチキ
4exs., 11.VI.1995, ビーチングおよび倒木上をはっていた.
2exs., 16.VI.1996, 同上(他にも数頭目撃).
2exs., 14.VI.1997, 同上
13. *Prothalia pictipennis* (LEWIS) イツモンナガクチキ
1ex., 11.VI.1995, ビーチングにより得た(動きはすばやい).
1ex., 14.VI.1997, 同上.
14. *Prothalia atricolor* (LEWIS) クロナガクチキ
7exs., 16.VI.1996, 根元部分のみのブナ立ち枯れの樹皮がはがれた部分(ちょうど陽が射し込むところに)次々と飛来し, 素早く動き回っていた.
2exs., 14.VI.1997, 日だまりの下草葉上および広葉樹生木をはっていた.



ヒゴツツナガクチキ

大峰山系も伐採がかなり進んでいるが, 弥山周辺山塊は比較的植生が残り良好な状態であるので, 当然上記 14 種を上回るナガクチキムシが記録されるものと思う。同好諸氏の追加記録を期待するものである。なお, 今回の報告にあたり, 日ごろより各種甲虫類についてご教示いただいている水野弘造氏には, 採集したナガクチキムシの同定の労を取っていただいた。また写真は芦田久氏にお願いした。ここに記してお礼申し上げる。

参考文献

- 水野弘造. 北九州の昆虫, 1991, 38(2):135-144; 1992, 39(1):33-44; 1992, 39(2):83-92; 1994, 41(1):25-31.
ねじればね, 1996, (74):6-8.
昆虫と自然, 1997, 32(2): 4-8.
秋田勝巳. ひらくら, 1997, 41(1):14-15.

(おくだよしひで)

虫屋の広場(5) [新刊・創刊紹介]

(1) 『Jewel Beetles コレクションシリーズ・タマムシ (Endless Collection Series Vol.2)』

大桃定洋・秋山黄洋 著；発行元 ESI (〒134 東京都江戸川区西葛西 3-15-16-503 FAX 03-3688-2115; 1997/2/15 発行).

全 59ページ, 40原色図版により世界の大型美麗タマムシがすばらしい出来栄えで楽しめる. 売値: 4500 円と手ごろであり, 甲虫屋としては 是非手元に置き, ページをめくってタマムシの豪華けんらんさを満喫したいものである. なお, このシリーズのVol. 1 はハナムグリで 1996年 9月に発行されたらしいが, 本書の中にも紹介がなく, 今後のシリーズ発行の予定も不明.

何はともあれ, タマムシ研究者として著名な本会会員二氏により, すばらしい刊行物が出されたことにお喜び申し上げます.

(2) 『Lucanus World, 甲虫と飼育』

環境調査研究所 (〒860 熊本市池田 3-6-47). 発行人:三宅純男. 年間購読 7000円. 1997 年 4月創刊.

甲虫専門の商業誌で創刊号はA4 版 48 ページ (広告込み). 原色写真多数を入れ, 採集記が豊富で, 誌名どおりクワガタ主体の編集のようである. 気軽に読めることを標ぼうするならば, 新種記載文などは入れぬ方がよい. ともかくこの種の情報誌の創刊努力には敬意を表したい. 望むらくは3号雑誌に終わらぬよう維持継続されんことを. (水野弘造)

会報

第48回(1996年度)大会記録

1996年12月15日に大阪市立自然史博物館講義室に於いて開催された。例年通り午前中はフリートークで、午後一時から大会が開催された。各担当委員からの運営状況などの報告があり、運営委員会から運営委員2名および編集委員1名の増員が提案され承認された。新運営委員として、木村史明氏(樫原市立昆虫館)と初宿成彦氏(大阪市立自然史博物館)が、新編集委員として伊藤昇氏(川西市)が決った。また、新しい学会の会則が提案されたが、広く会員の意見を聴くということで、試案を会員が目を通して承認を得ることとなり、評論52(1)と共に案文を送ることになった。(会則の承認案件は今年度、1997年末の大会に提出予定)。

会務報告後、水野弘造氏による“日本産ナガクチキムシ類の概説”，岸本年郎氏(東農大大学院生)による“東南アジアの自然と昆虫”(特にハネカクシ類の)の講演が行われた。水野氏のナガクチキの話は、採集記録をもとにした各県別のファウナの解明状況・各種別の採集難易度・生態・分布など、先ず研究の基礎となる資料の採集・調査法を中心にした内容で、岸本氏の講演は、自ら赴いたマレー・タイなどの各地の景観やムシの美しいスライドを中心に、東農大の研究者の活動状況などの紹介も含めての内容のものであった。

大会終了後、PM5時から近鉄百貨店(天王寺)の桃谷楼において懇親会が持たれ、8時過ぎまで虫談義に花が咲き、出席者一同おおいに楽しい時を過ごした。

大会出席者(*は懇親会出席者)：

*秋田勝巳	芦田久	藤田國雄	春木實	*春沢圭太郎	畑山武一郎	*林匡夫	*林靖彦
*穂積俊文	*生谷義一	*今坂正一	伊藤昇	伊藤建夫	*岩田隆太郎	蟹江昇	木村史明
*岸本年郎	北山昭	*糸久仁雄	的場績	松田吉弘	三木三徳	三宅純男	*三宅義一
*水野弘造	*奈良一	生川展行	野村英世	*野村全	*大石久志	奥田則雄	斎藤昌弘
澤田高平	*初宿成彦	*田中昭太郎	谷角素彦	*塚本珪一	*八木正道	山地治	安井通宏
吉田元重							(林靖彦 記)

3月例会記録(1997年)

昨年より再開し、会員相互の親睦を目的とした例会第二回目(本年度第一回目)は1997年3月30日に大阪市立自然史博物館に於いて開催された。午前中は同定と懇親で、午後から会務報告のあと、秋田勝巳氏による『ロシア沿海州の自然と昆虫』と題しての講演が行われた。

氏の調査成果もさることながら、展足された標本多数と生態を交えたスライドを用いた報告は、場所もファウナも身近かで、多くの出席者の興味を誘い、質疑応答の後も標本を囲んで話がはずんだ。最後に恒例の一人一話があり、その後散会した。

出席者は下記の通り(敬称略・アルファベット順)。

秋田勝巳 林匡夫 林靖彦 生谷義一 伊藤昇 伊藤建夫 岸井尚 北山昭 楠井善久 水野弘造
野村英世 奥田好秀 大石久志 初宿成彦 高羽正治 八木正道 山本博子 吉田元重 吉川正彦

(伊藤建夫 記)

発行: 1997.9.15 日本甲虫学会

〒558 大阪市住吉区菟田2-16-5 レジデンス寿202 林 匡夫
Tel: (06) 698-2964 振替口座: 00990-8-39672

ねじればね原稿送付先

〒611 宇治市木幡熊小路19-35 水野弘造 Tel 0774-32-4929
〒614 八幡市男山雄徳8 E7-303 伊藤建夫 Tel (Fax) 075-983-3491